

テレビ番組における産炭地の表象とその変容に関する研究 The Representation of Coalfields and its Transformation in TV Documentaries

木村 至聖¹
Shisei KIMURA

¹ 甲南女子大学人間科学部 Konan Women's University

要旨…本研究では、NHKアーカイブスに保存された、日本の産炭地やそこに生きる人々を描いたドキュメンタリー番組群を分析対象として、そこでいかなる対象が、いかなる問題機制のもとで捉えられてきたのか、その分布と変遷について考察した。その結果、ドキュメンタリーが等身大の人間を描くようになり、その人々への共感というミクロな視点を獲得していく一方で、彼ら/彼女らをとりにまくマクロな構造的な問題が十分に論じられなくなってきたという課題が明らかになった。
キーワード ドキュメンタリー、アーカイブ、炭鉱、産炭地、記憶

1. はじめに

私はこれまで、近代産業の痕跡である「産業遺産」の表象がグローバル、ナショナル、ローカルなスケールのいかなる力学から生み出されているのかについて、文化社会学、地域社会学の観点から研究してきた。とりわけ近代化の基礎たるエネルギー産業＝炭鉱、石炭産業に注目し、全国各地および海外で石炭産業や炭鉱の記憶の継承、およびそれを通じた地域再生に取り組んでいる個人やNPOへの聞き取り調査などを行ってきた。そのなかで、石炭産業が盛んであった当時に直接知らない世代が、地域における炭鉱の記憶の継承の担い手になりつつある現状を踏まえ、彼ら/彼女らが当時のことをよりよく理解し、議論し、活動するための資源としての「記録」（文書や映像など）の重要性を認識するようになった。

こうした経緯から、NHKアーカイブス学術利用・関西トライアルⅡ（第1期）に申請し、2013年3月にすべての関連コンテンツの閲覧を終了した。閲覧した番組数は146本と膨大であったため、研究成果は順次小テーマに分けて公開し始めている段階である。本研究は、その研究成果の一部であり、146のすべての番組を概観する総括的な議論として位置づけられる。

2. 研究の目的

2011年に山本作兵衛の炭鉱記録画が世界記憶遺産に登録されたのは記憶に新しいが、今世紀に入り西欧を中心に炭鉱の遺構が次々に世界遺産になるなど、炭鉱の記憶継承の取り組みが加速している。NHKアーカイブスには「〈炭坑〉の系」（水島・西・桜井 2011）を成すまでの、数多くの炭鉱関連番組が保存されているが、これらの番組群もまた貴重な記憶遺産といえる。

しかしながら、このように炭鉱・産炭地に関しては数多くの番組が存在するにもかかわらず、それらを正面から総括しようとする試みは未だ行われていない。それは、番組数が膨大、かつドキュメンタリー番組でも様々なジャンルにまたがることに加え、それが放送時期や扱われる地域（炭田）によって実に様々なテーマ（労働問題、貧困問題、企業と地域社会、高齢化と医療、戦後補償問題、記憶の継承など）と関わりあうものであるためかもしれない¹⁾。だが、炭鉱の記憶の当事者が高齢化し、旧産炭地でも世代交代が進んでいる現状では、こうして蓄積されてきた記録の整理は喫緊の課題といえる。

また、丹羽（2001）は、日本のドキュメンタリー番組の先駆けである「日本の素顔」の作り手たちの抱えてきた問題機制を探るなかで、草創期ドキュメンタリー番組が、「公正中立」という立場から、「彼ら・彼女ら＝異常民」へのまなざしを媒介として、「私たち＝日本人」という自己意識を形成していったことを明らかにしている。このように、番組はたんなる事実の記録というだけではなく、当時の制作者たちの問題機制もまた記録したのものとしてみることができる。

そこでここでは、NHKアーカイブスにおける炭鉱・産炭地を扱った「〈炭坑〉の系」の番組群を思い切って俯瞰的に整理することで、いかなる対象が、いかなる問題機制のもとで捉えてきたのか、その分布と変遷について考察してみたい。

3. 研究の方法

(1)対象となる番組とその抽出方法

本研究では、NHKで放送された、日本の産炭地とそこに生きる人々を描いたドキュメンタリー番組を分析対象とする。対象は、NHKアーカイブス学術利用・関西トライアルⅡに採用された『テレビ番組における産炭地の表象とその変容に関する研究』に基づき、私が閲覧した146の番組である。

ここで対象とした炭鉱関連ドキュメンタリー番組は、『日本の素顔』（1957～64）、『現代の映像』（1964～71）から『NHKスペシャル』（1989～）に連なる社会派ドキュメンタリー、『ある人生』（1964～71）、『ルポルターージュにつぼん』（1978～84）などの人間ドキュメンタリーだけでなく、報道とドキュメンタリーの間期的性格を持つ『クローズアップ現代』（1993～）や、『くらしのジャーナル』（1991～95）のような生活情報番組内での特集、『新日本紀行』（1963～82）のような紀行番組、『EIV特集』（1993～2000、2004～）のような教養番組など多岐にわたる。それぞれ番組のジャンルによって産炭地の取り上げられ方は異なるが、共通するのは現地取材によって得た素材を構成した番組であるという点である。よってここでは、ドラマやアニメなどのフィクション、生放送主体の番組や、スタジオのみで展開される時評番組などは分析対象から除かれている。

対象の抽出にあたっては、NHKアーカイブス内の専用端末で、「炭鉱」「炭坑」「炭砒」「産炭地」など関連するキーワードで番組を検索した。ここでは、ニュース、ラジオを除いた番組情報のタイトルおよび番組全体を検索対象とした。そこから得られた結果から重複を省き、番組情報内の「コンテンツ基本情報」にある要約を参考にして、番組を手作業で絞りこんだ。

(2)分析枠組

戦後の石炭産業について経済地理学の観点から研究した矢田（1975）は、石炭産業は天然に与えられた石炭資源を固有の労働対象としており、資源の賦存状態が生産力を規定する重要な要因となっていることから、石炭産業の合理化における地域的差異が重要であると指摘している。戦後日本の石炭産業史はまさに合理化の歴史であったが、それは全国一律に進んだわけではなく、まさにこの資源の賦存状態（炭層の深度、厚さ、傾斜、炭質など）の違いによって、炭田ごとに大きく異なる様相をみせたのである。たとえば、同じ九州の炭田であっても、筑豊と三池あるいは崎戸・高島炭田は大きく性格が異なる。三池炭田、崎戸・高島炭田は、深度は深いものの、炭層は厚く傾斜は緩いという好条件の下、大規模な設備投資による機械化・合理化が可能であり、ゆえにいずれも大手炭鉱による生産が中心であった。そのことは、三池炭田の三池炭鉱が1997年、崎戸・高島炭田の池島炭鉱が2001年と遅くまで生き残ったことと無関係ではないだろう。そして閉山時期が異なれば、その時期ごとの景気の良し悪しなどが失業した炭鉱マンたちの再就職に影響し、地元自治体の町づくりのあり方にも影響してくるのである。

そこで本研究では、こうして抽出された番組を、まず国内の石狩／釧路／常磐／山口／筑豊／三池／崎戸・高島の7炭田ごとに分類した。さらに、石炭政策の時期区分（嶋崎 2010）にポスト石炭政策期を加えた7期に時期区分し、この地域×時期のマトリックス上での番組の分布を調べた。番組数の量的な分布は、表1の通りである⁹。この分布を踏まえて、時期ごとに（2番組のみのI期は除く）、どの炭田が注目され、それがいかなる問題機制によって捉えられているかを明らかにしていきたい。

表1 番組数の量的な分布

	石狩	釧路	常磐	山口	筑豊	三池	崎戸・高島	計
I：需給変動期(1949-58)							2	2
II：スクラップ・アンド・ビルド期(1959-67)	3		1		13	3		20
III：縮小均衡期(1968-72)	3		1	1	4	1		10
IV：石炭見直し期(1973-81)	6	1		1	4	1	1	14
V：需要に見合った生産体制期(1982-91)	27	3	3	2	7		9	51
VI：構造調整及び段階的縮小期(1992-2001)	12	3	2	2	9	7	3	38
VII：ポスト石炭政策期(2002-)	10	1	2		11		3	27
計	61	8	9	6	48	12	18	162

※6～10番組、11～20番組、21番組以上の順に網掛けを濃くしている

4. 分析結果

(1) II期：スクラップ・アンド・ビルド期（1960～67年）

全体の傾向としてまずみえてくるのは、やはり多くの炭坑が密集していて、生産高の高かった石狩、筑豊炭田の番組数の多さである。とくに、この時期においては、番組の半数以上が筑豊炭田を舞台としており、失業と生活保護（依存）、家庭崩壊、炭鉱事故、下請けの増加と組合の衰退など、失業地帯としての筑豊の悲惨な状況を描くものであった（『日本の素顔 黒い地帯～その後の炭鉱離職者達～』（1960年）、「日本の素顔 黒い 墓碑～石炭産業合理化の断面～」（1961年）ほか）。三池争議もたびたび言及されるものの、三池をメインに扱った番組は実は1番組のみ（『日本の素顔 三池』（1960年））であり、戦後最大の炭鉱事故と言われる三池三川坑の炭じん爆発事故（1963年）は、ほとんど触れられていない。こうした偏りは、人々から「忘れられている」「社会問題」にフォーカスしようとする当時のドキュメンタリーの自己規定によるものであったことが、番組の内容から推測できる⁹。

また、表現手法の上で注目されるのが、ナレーションの比重の大きさである。それは当時の録音技術的な条件によるところが大きかったと思われるが、ナレーションが淡々と場面の意味づけを行なう当時の表現は、「現場」の生々しい姿を映像として捉えながらも、それをマクロな「（日本の）社会問題」としてきわめて冷静に解釈する視点を担保するのに一役買っていたと考えることができる。

一方、この時期も終盤にさしかかって、ようやく筑豊以外の産炭地の多様な姿が番組としてあらわれるようになってくる。1967年の「現代の映像 第2閉山期」ではじめて石狩炭田（豊里炭鉱）が扱われ、続いて同年「現代の映像 閉山と老人」で茶志内炭鉱が舞台となり、筑豊と同じ歪みが北海道でも続くことが示唆されている。その一方で、1966年「新日本紀行 いわき～福島県～」では、観光産業への転換に成功した常磐炭鉱が紹介されている¹⁰。このなかで、次第に名前を持つ個人が登場し（例：「閉山と老人」の「井上のおばあちゃん」）、次第に自らの声で語り始めるようになる¹¹。

(2) III期：縮小均衡期（1968～72年）およびIV期：石炭見直し期（1973～81年）

縮小均衡期には、合理化の波が一段落したため炭田を舞台とした番組は全体として減少し、産炭地の繁栄と衰退を回顧するようなノスタルジックなトーンの番組が基調となる。スクラップ・アンド・ビルド期の終わりにもすでにその傾向がみられたが、たとえば、豊里炭鉱の同窓会を追った「現代の映像 廃坑は遠く」（1969年）、炭鉱の記憶を残そうと活動する人々の姿を描いた「ドキュメンタリー 筑豊のモニュメント」（1972年）などが短い期間に放送されている。また、この時期になって、ようやく三池争議と三川坑事故を扱う番組（「現代の映像 三池の10年」（1970年））が放送されたことからわかるように、この時期、炭鉱の記憶の「歴史」化が急速に進んだのである。

オイルショックをきっかけとした石炭見直し期については、縮小均衡期から大きなトーンの変化はない。「石炭見直し期」なのにもかかわらず、1972年の美唄炭鉱の閉山が終焉へと向かっていく日本の石炭産業の印象をかたちづけているが（「特別番組 閉山～美唄市常盤台からの報告～」（1973年）ほか1番組）、「異郷に生きる 南米の炭鉱離職者」（1977年）では、炭鉱が過去のものになってしまいつつあることへの批判と警鐘も描かれている。また、「テレビの旅 みなおされる石炭産業」（1981年）、「経済情報81 石炭転換は進むけれど」（1981年）などで、鉦路や宇部における現役の石炭産業の可能性に光があたるが、そこに1981年の夕張新鉱の事故、円高などが重なってかき消されてしまっている。

(3) V期：需要に見合った生産体制期（1982～91年）

この時期には、1981年の夕張新鉱事故により夕張をとりあげた番組が急増し、いかにずさんな保安管理が行なわれていたか、またそれをゆるしてしまった国の姿勢への批判、そして事故後の地域社会の（人間関係の）急速な崩壊が描かれている。「土曜リポート 北炭夕張の祈り」（1982年）のような事故の検証も交えた番組や、「NHK特集 沈黙の谷」（1983年）のように事故後の地域社会の様子をとらえた番組など、1982年から1986年の5年間に計8番組が放送されている。また、1986年の高島炭鉱閉山も注目され、こちらでも地域社会の急速な崩壊が描かれている。いずれも大手炭鉱と運命をともにしてきた地域であり、それゆえに閉山の暴力的な余波をうけ、その崩壊も大規模なものとなっている。特徴的なのは、とくに高島炭鉱閉山を扱った7番組のすべてが、親の再就職の困難とともに翻弄される子どもたちの姿を中心的なモチーフとしてとりあげられていたことである。「おはようジャーナル 炭鉱っこ・元気かい」（1987年）は、閉山から10ヶ月にわたって、全国に転校していった子どもたちを訪ねてバイクで旅する先生の姿を追っており、新しい環境で戸惑いながらも力強く生きていく子どもたちの様子が描かれている。

こうした地域の絆の強さと、それゆえの別れのつらさ（離島では港での見送りのシーンが象徴する）というモチーフは、この時期の終盤にかけて砂川（1987年閉山、3番組）、幌内（1989年閉山、5番組）、南大夕張（1990年閉山、2番組）など石狩炭田の各炭鉱の閉山を扱った番組でも繰り返されることになる。

その一方で、筑豊炭田では工業団地の造成や商業都市化などで新しい町づくりが進められ（「テレビの旅 筑豊の町づくり」（1984年））、石狩炭田では炭鉱閉山後の新たな産業への試行錯誤が描かれる（「NHKモーニングワイド につぼん列島ピックアップ 炭鉱員シイタケ作りで再出発」（1988年））。こうしたなかで、夕張では大規模な起債による観光開発が始まるが、後の夕張市財政破たん以前にこの観光開発を紹介している番組は、たった1番組のみであった（「中学校特別シリーズ 日本地理 石炭の町から観光都市へ 北海道・夕張」（1990年））。

(4) VI期：構造調整及び段階的縮小期（1992～2001年）

この時期にも、コンスタントに（旧）産炭地を舞台とした番組が制作されている。引き続き石狩の諸炭鉱や九州の三池炭鉱など大手の歴史ある炭鉱が閉山していく時期であっただけでなく、戦後50年前後にあたるため、炭鉱の歴史の総括を行なう番組が数多く制作された。大別すると、1) 石狩炭田における炭鉱の記憶の継承、2) 1997年の三池炭鉱閉山にともなう番組、3) さらに戦後50年関連番組がこの時期に放送されている。1) については、かつての筑豊で行なわれてように、炭鉱の記憶を言葉や文化（盆踊りなど）を通して受け継いでいこうとする活動が紹介される（「ETV特集 よみがえる炭鉱の記憶」（1999年）、「列島スペシャル 盆唄がよみがえった夏～北海道 三笠～」（2001年））。一方、2) 三池炭鉱においても歴史の総括と事故・争議のその後を描く番組が計6番組放送されている（「クローズアップ現代 ヤマが消える ～三井三池炭鉱閉山～」（1997年）ほか）。しかし、うち3番組は過去の記録映像を中心に三池炭鉱の歴史を総括するものであり、1) の石狩炭田における記憶の継承と比べると、対象と距離を置いたものになっている。3) については、1993年の外務省報告書の発見による中国人強制連行の告発（「クローズアップ現代 発見 幻の外務省報告書」（1993年））、および筑豊でも強制連行の告発（「列島リレードキュメント 「強制連行」を語り継ぐ 福岡県・筑豊」（1993年））など実に6番組が集中しているが、これより後の時期（ポスト石炭政策期）にはこうしたテーマの番組はほとんど放送されていない。

これ以外には、最後まで残った炭鉱に生きる人々の苦悩（「ETV特集 シリーズ 日本を歩く 最後の炭鉱に生きる ～長崎県・池島～」（1999年）、「列島スペシャル 生き残りをかけた選択 ～北海道太平洋炭礦・苦悩の1年～」（2000年））が描かれているが、この時期の炭鉱関連番組群全体からすると扱いは小さい。

(5) VII期：ポスト石炭政策期（2002年～）

この時期には、2006年の夕張市の財政破綻、地域医療の問題が「社会問題」として注目された（「クローズアップ現代 地方自治体は生き残れるか 夕張破たんの教訓」（2006年）、「ETV特集 地域医療再生への挑戦 夕張市立総合病院の100日」（2007年）ほか計7番組）。とくに、地域医療の再生のために奔走する村上智彦医師の姿を追うものが大半を占め、国や自治体に対する依存が体質化してしまった夕張市民との格闘がテーマとして描かれている。

一方、筑豊炭田については、炭坑節の再生（「新日本紀行ふたたび NHK アーカイブス 炭坑節が生まれた町～福岡県田川市～」（2007年））や、2011年の山本作兵衛の炭鉱記録画の世界記憶遺産登録を受けた番組が複数放送されるなど（「クローズアップ現代 炭坑（ヤマ）が“世界の記憶”になった」（2011年））、炭鉱はもはや完全に過去の「記憶」としての扱いが定着しつつあることがうかがえる。また、最後の炭鉱であった池島炭鉱（2001年閉山）、太平洋炭鉱（2002年閉山）のその後を描いた番組はあまり制作されていない（「列島スペシャル ヤマに生きた男たち～長崎・池島炭鉱閉山～」（2002年）、「につぼん紀行 忘れないで ぼくらの島を～長崎・池島～」（2002年）の2番組のみ）。

4. 考察

番組数が多い炭田／時期のセルごとに、複数の番組でたびたびテーマとなるキーワードを挙げたものが表2である。1960年代以前、ドキュメンタリー番組草創期において、筑豊炭田がとりわけ失業地帯、社会問題の温床として注目されたのはすでにみた通りだが、その後石炭産業の中心が筑豊から石狩炭田へと移っていくとともに、ドキュメンタリー番組も石狩炭田を扱った番組が主流となっていく。そのなかでもとくに数多くの番組を生み出したイベントが、1981年の北炭夕張新鉱のガス突出事故と、2006年の夕張市の財政破たん（にともなう医療の崩壊）であった。前者は合理化、生産向上の名のものと保安軽視、国内の原料炭を求めていた鉄鋼・電力業界に押されてずさんな開発計画をゆるしてしまった国への批判、そして地域社会がいかにその結果に翻弄されるのかという、戦後日本の石炭政策そのものへの批判ともなりうる視点が提示されていた。一方、後者は財政破たんした自治体における医療制度の危機が、必ずしも夕張だけに限らない高齢社会を迎えた日本社会全体の問題であることが示唆されていた。このように、いずれも産炭地から戦後日本社会を問い直す大きなテーマが提起されていたことは注目すべきであろう。

しかしながら、意外にもこの2つのイベントを関連づける視点は、番組のなかではほとんどみられない。1981年の事故の原

因を検証する番組で明らかにされているように、そもそも夕張新鉱は国の全面的なバックアップのもとで開発され、その失敗によるひずみは非常に大きなものであった。それを埋め合わせようとしたものが、破たん後に批判にさらされることになった大規模な起債による観光開発なのであった。2006年以降の番組では、村上医師の強烈なキャラクター性によって、夕張市民の自治体への依存体質が規定されるが、それはこうした歴史的構造的背景によって形成されてきたものであることを見落としてはならないのではないだろうか。

同様の課題は、ほぼ全期間にわたってコンスタントに番組が制作され続けてきた筑豊炭田についてもあてはまる。筑豊炭田については、表2にみられるとおり、番組の主なテーマが時期によって実に多様である。裏を返せば、コンスタントに番組が作られてきたにもかかわらず、それぞれの番組のテーマが後続する番組にあまり受け継がれていないということである。たとえば、Ⅱ期における筑豊炭田を規定してきたといっている「失業地帯」の問題だが、Ⅴ期において「現在」の町づくりが描かれる際には、炭鉱失業者たちが一体どこへ消えたのか言及されることはない。また、Ⅵ期にたびたび制作された「強制連行」を告発する番組のテーマは、のちの筑豊における炭鉱の記憶の継承を扱う番組のなかにはほとんどあられない。

こうしたことは、テレビ・ドキュメンタリーが現在の産炭地に生きる人々の現実寄り添った結果なのかもしれない。町村(2011)は、かつてテレビ・ドキュメンタリーが、映画に対するアイデンティティの確立として「人間」を描くという手法をとるようになった、と指摘している⁹⁾。すなわち、テレビは長らく、個人のミクロな実践に寄り添い、それに共感しよう／させようとする表現手法を洗練させてきたのである。このことが端的にあらわれるのが、Ⅴ期以降に繰り返されてきた、閉山と子どもというモチーフである。炭鉱の閉山によって翻弄される子どもたちの姿は、視聴者に強い共感を覚えさせる。この点で、テレビ・ドキュメンタリーの試みは成功していると言える。だがその一方で、こうしたミクロな実践への共感による番組構成は、地域社会（産炭地）が歩んできた歴史やその背景にあるマクロな構造的問題を視野の外に置いてしまいかねないのである。

表2 番組のテーマの傾向（ ）内は関連する番組数

	石狩	釧路	常磐	山口	筑豊	三池	崎戸・高島
I：需給変動期(1949-58)							
II：スクラップ・アンド・ビルド期(1959-67)					失業地帯(9)		
III：縮小均衡期(1968-72)							
IV：石炭見直し期(1973-81)	閉山(4)						
V：需要に見合った生産体制期(1982-91)	事故(8) 閉山と子ども(3)				町づくり(2)		閉山と子ども(5)
VI：構造調整及び段階的縮小期(1992-2001)	閉山(3) 記憶(3)				強制連行(3)	歴史の総括(3)	
VII：ポスト石炭政策期(2002-)	地域医療(7)				記憶と遺産(7)		

5. 結論

丹羽(2001)が指摘したように、かつての初期ドキュメンタリーは、他者としての「彼ら・彼女ら」へのまなざしを通して「私たち＝日本人」を自己規定しようとした。だが、今日のドキュメンタリーにおいては、カメラ(制作者)が登場人物に寄り添い、その思いや実践に共感することで、「私たち」と「彼ら・彼女ら」の距離を規定している構造的問題を視野の外に置いてしまう。いわば「私たち」は、「彼ら・彼女ら」への共感によって免罪されてしまうのである。

だが、(旧)産炭地が抱える問題や歴史化・記憶化に関わる課題は、近代化や敗戦からの復興を目指す国家の強力な推進力のもと産炭地が開発され、エネルギー革命後、急速に合理化されていったという怒濤の歴史を抜きに考えることはできない¹⁰⁾。幸いなことに、NHKアーカイブスには、すでにそれだけの構造的な分析に耐えうるだけの豊かな蓄積が残されている。こうした意味でも、対象となる人々に寄り添う共感の姿勢を持つ今日の／これからのドキュメンタリー番組は、こうしたアーカイブの記録映像の視聴／活用による歴史的・構造的視点の導入によって、今後いっそう複眼的に視聴／制作されていく必要があるだろう。

補注

- (1) とはいえ、「原子力」をテーマとした七沢 (2008) や「戦争」をテーマとした桜井 (2005) のように、膨大な番組群を扱って体系的な内容分析を行なった貴重な成果も存在する。
- (2) ここでは、複数の炭田に関わる番組はそれぞれで1番組としてカウントしている。
- (3) たとえば、「黒い地帯～その後の炭鉱職者たち～」(1960年)では、次のようなナレーションが挿入されている。「一年ほど前のことです。黒い羽根の運動を契機に、炭鉱地帯の失業者のことが急にジャーナリズムにクローズアップされました。ヤマの人たち、子どもたちを救え。おびたしい活字と写真が氾濫しました。しかし間もなく、この人達のことはニュースの世界から消え去りました。三池争議が起きたからです。すべてのジャーナリズムの目はこの地点に集められました」。ここからは、当時の報道において三池争議がもつばらの関心の対象となっている一方で、テレビ・ドキュメンタリーがあえてそこから忘れ去られようとしている筑豊の窮状をとりあげようとした姿勢が読み取れる。
- (4) 常磐炭田に関する番組は、実はⅡ期からⅦ期に至るまでほぼコンスタントに放送されている(Ⅳ期を除く)。その9番組中6番組でハワイアンセンター(現在のスバリゾートハワイアンズ)が紹介され、「炭鉱から観光へ」の成功例として国内の炭田のなかでも特異な地位を獲得している。
- (5) 鈴木(2005)は、1960年代に「ノンフィクション劇場」などの民間放送のドキュメンタリー番組が、個人を等身大に描く方針をとったと指摘しているが、そうした傾向はNHKでも同様にもみられたといえる。
- (6) これも、上記の鈴木(2005)の指摘と一致する。
- (7) このことは、今日までの原子力エネルギーをめぐる中央—地方関係などの問題系にも重ね合わせて考えることができるだろう。石炭産業との連続性を示す番組としては、「ふるさとネットワーク 北海道中ひざぐりげ 荒海に文明開化の音がする 北海道泊村」(1988年)で、北海道最古の炭鉱とされる茅沼炭鉱が1964年に閉山した後の泊村の人々の記憶と現在が紹介され、番組の最後には道内唯一の原子力発電所が建設されつつある(放送の翌年運転開始)様子が描かれている。

参考文献

- 1) 水島久光・西兼志・桜井均(2011): NHKアーカイブスの構成に関する研究(前編), 『放送研究と調査』2011年4月号, 38-57.
- 2) 七沢潔(2008): 原子力50年・テレビは何を伝えてきたか——アーカイブスを利用した内容分析, 『NHK放送文化研究所年報』52:251-331.
- 3) 桜井均(2005): 『テレビは戦争をどう描いてきたか——映像と記憶のアーカイブス』岩波書店.
- 4) 丹羽美之(2001): テレビ・ドキュメンタリーの成立——NHK『日本の素顔』, 『マス・コミュニケーション研究』59:164-77.
- 5) 嶋崎尚子(2010): 石炭産業の終焉過程における常磐炭鉱 KK 閉山タイミング——産炭地比較研究にむけて, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56:33-46.
- 6) 矢田俊文(1975): 『戦後日本の石炭産業——その崩壊と資源の放棄』, 新評論.
- 7) 町村敬志(2011): 『開発主義の構造と心性——戦後日本がダムでみた夢と現実』, 御茶の水書房.
- 8) 鈴木常恭(2005): テレビ・ドキュメンタリーにおける表現の生成と変容についての一考察——「物語るドキュメンタリー」と「物語らないドキュメンタリー」, 『尚美学園大学芸術情報学部紀要』8:11-33.